

# 明治期における「次第」について

ラナダイレクサ デインダ ガヤトリ

## 1. はじめに

現代語における「次第」の意味および用法に関する研究については既に検討がなされているが、近代語の「次第」の意味および用法に関する研究については、十分に検討が進められているとは言いがたいようである。従って、本稿では、明治期における「次第」について検討および分析を行うことにする。

まず、辞書による意味記述をみていく。次に、明治期における英和と英辞書における「次第」の意味記述がどのようになされているのかについてまとめる。さらに、明治期の用例を『朝日新聞』『太陽』『近代女性雑誌』や明治期の小説などから用例を収集し、分類し分析する。

なお、現代語では「次第」は「次第だ」「…次第、～する」の用法があるほか、「次第に」のような副詞的な用法も存在する。現代語における、このような用法が近代語においてはどのように現れているのか、調査していく。

## 2. 「次第」の先行研究について

ここでは、2つの先行研究について、その要旨をまとめる。

### 2.1 鳴海伸一『「次第」の接尾語用法の成立と展開』（『国語学研究』45巻2006年3月）

「次第」の接尾語用法は、漢語の原義を利用して平安、鎌倉時代に成立したが、室町時代には「ある基準で定められる」という意味を軸に上接語の性質が変化した。江戸時代には上接語の持つ強制力が弱まり単に相関関係を表す用法が生じた。さらに動詞連用形をも上接し得るようになり、「～するとすぐに」という意味の用法が発生した。この時間的意味は空間的意味から移転ではなく、「次第」が接続助詞化して従属節と主節の動作の継起性に焦点が当たることによって生じたことを主張した。(120頁(1))

### 2.2 郭木蘭『「次第」考続編 —ジャンル別の用法について—』（東洋大学大学院紀要（文学研究科）42巻（文学・社会学）2006年3月）

「次第」という語は、変体漢文と和漢混淆文とにおける用例が最も多く見られたが、変体漢文あるいは広義の漢文においては、本義または本義に近い用法を中心として用いられている。その中で、和漢混淆文では、副詞の用法そして形式名詞としての用法が台頭し、新たに接尾辞としての用法が用いられていることが確認された。それとは異なり、和文では名詞・副詞の用法ほかに、動作を従う動詞としての用例が見られた。(104頁)

### 3. 辞書の意味記述

「次第」の意味および用法について、『日本国語大辞典』、『日本語文型辞典』、『現代副詞用法辞典』、『使い分けのわかる類語例解辞典』、『類義語使い分け辞典』、をみていくことにする。

#### 3-1 『日本国語大辞典』（第二版）

『日本国語大辞典』では「しだい」、「しだいしだい」、「しだいに」の記述をみていく（用例は項目の最初の例のみを示し、他は省略する）。

し-だい【次第】

【一】〔名〕上・下、前・後などの並びをいう。

(1) 順序。順。ついで。

\* 霊異記〔810～824〕上・三〇「我、兄弟上下の次第無くして理を失ひ」

(2) 正しい順序。正当な手続。

\* 日本三代実録・貞観四年〔872〕八月二五日・宣命「継々仕奉るべき次第として中納言従三位源多朝臣、従三位藤原常行朝臣をば大納言官に〈略〉任せ賜はくと」

(3) (一する) 順序を追ってすること。順序正しく並ぶようにすること。順序をつけること。

\* 宇津保物語〔970～999頃〕葦開上「あはれいかにして侍るらん、母宮こそはしだいし給つらめ、いと物器用に心おはせし人ぞかし」

(4) はじめから終わりまで。一部始終。

\* 大和物語〔947～957頃〕御巫本附載「物のあるやうありししだいなど諸共にみける人なりければ、げにあやしく人々やいひたらん、などぞいひける」

(5) 物事の事情や由来、理由、成りゆきなど。

\* 保元物語〔1220頃か〕上・新院御謀叛思し召し立たる事「外記・官吏等いさめさせ給ふに、あやまたぬ次第を弁へ申せば」

(6) 能や狂言で用いる語。〔以下省略〕

(7) 拍子、調子。

【二】〔接尾〕名詞や動詞の連用形に付いて、その物や事柄の事情に因る意を表わす。

(1) 名詞に付いて、その人の意向、またはその物事の事情のいかんによる意を表わす。

(2) 名詞または動詞の連用形などに付いて、その動作が行なわれるままにする意を表わす。放題。

\* 米沢本沙石集〔1283〕九・四「情（なさけ）ありて命を助けながら、猶僻事に成りて、横さまに損じられん事こそ術無き次第にて侍れ」

(3) 動詞の連用形に付いて、その動作がすんだら直ちにの意を表わす。

\* 室町殿日記〔1602頃〕一「手透次第に実否可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>糺由被<sup>レ</sup>申候条、可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>其意<sup>一</sup>候」このほか、「しだいしだい」「しだいに」があるが、これらは省略することにする。

### 3-2 『日本語文型辞典』

『日本語文型辞典』(2004) (グループ・ジャマシイ編 くろしお出版) には、「次第」の意味および用法について、次のように記されている。

【しだい】

3 Vる/Vた しだいだ

(1) とりあえずお知らせした次第です。

(2) 〈挨拶状〉 今後ともよろしくご指導くださいますようお願い申し上げますの次第でございます。

成り行きからここに至った事情、わけなどを述べるのに使う。書きことば的。慣用的な言い方では形容詞が用いられることがある。

例 こんなことになってしまい、まったくお恥ずかしい次第です。

### 3-3 『使い分けのわかる類語例解辞典』

『使い分けのわかる類語例解辞典』(1994) (遠藤織枝他編 小学館) では、首尾、始末、次第の三語の使い分けについて次のように記されていた。

首尾／始末／次第

共有する意味：物事の状況・事情 [英] The outcome

使い方→首尾：上々の首尾。困難な状況を首尾よく切り抜ける。彼の論理は首尾一貫していない。

→始末スル：あんな始末になって申し訳ない。

→次第：事の次第を報告する。厚くお礼を申し上げますの次第です。

使い分け：

〔首尾〕は、物事の経過の状況、または、その結果の意と、始めと終わりの意を持つ。

〔始末〕は、常に悪い結果の状況をさす。

〔次第〕は、「感謝する表すの次第です」のように物事の順序として自然にそういう結果になるという意や、「世の中すべて金次第」のように…によって決まるの意、また、「…次第、～(する)」の形で、…してすぐ～(する)の意などでも使う。

### 3-4 『類義語使い分け辞典』

『類義語使い分け辞典』(1998) (田忠魁・金相順・泉原省二 研究社) では、「次第」について、以下のように記されていた。

「次第」は「式次第・事の次第を詳しく話す・次第によっては責任を取ってもらう・言いなり次第になる・それは君の気持ち次第だ・わかり次第お知らせする」など、次に何をするかという順序を意味するところから、「事の成り行き・経過」を表し、更に言われたまま受け入れる・その成り行きの結果が何かに依存する・何かに寄って決まることを意味し、二つの事柄の続き方が、時間的に非常に短い(すぐに)ことまで表す。

変化の場合は始めは目立たず、速度も遅い状態・程度が時間の経過に従ってスピー

ドを増やし、加速度的に変化が大きく目立つようになる場合に使われる。「次第次第に」は「次第に」の強意表現。

#### 4. 明治期の英和和英辞書における「次第」の記述

明治期の英和和英辞書において、「次第」について、どのように記述されているのかを調査した。

1) 堀達之助 (1862) 『英和对訳袖珍辞書』(秋山書店刊の複製による)

英	和
Order,s	
In order	為メニ・故ニテ
Immediately,adv	真テニ
Directly ,adv	真直ニ直
Depend-ed-ing,v.n	属シテ居ル・寄りズガリ・信用スル
Circumstance,s	光景・形勢
In case	～スル時ニ
As soon as	直ニ
Accord-ed-ing, v.a.et n	一致サセル・免ス中直リスル・一致スル

2) ヘボン (1867) 『和英語林集成』(明治学院大学刊の複製による)

和	英
SHIDAI, シダイ、次第 ,n	Order, arrangement, reason, account, consideration, in proportion to,according to,as soon as.
	On that account
Sono shidai ni yotte	According to one's mind
Kokoro-shidai	As soon as it is done
Deki-shidai	As soon as the letter is received
Tegami no tszki-shidai	As soon as it stops
Ame no yami shidai	
	Gradually, by degrees,by little and little
SHIDAI-NI, シダイニ、 次第 ,adv	Gradually becomes colder.Syn dan-dan
—samuku-naru	

英	和
Soon	Hayaku;jiki-ni;szgu-to;chika-uchi ni;chika-jika;kinjitsz;tōkaradz;hodonaku;mamonaku Shidai
As_as Immediately	Jika.ni;jiki-ni;szgu-ni;tadachi-ni;tachi-machi ni;tachi dokoro ni; yaniwani Szgu-ni,jiki-ni,jika-ni,tadachi ni
Directly Depend	Sagaru ; yoru ; tanomu ; makaseru ; tayoru ; shindzru ; shinkōszuru, sh'tagau;ate ni szru. Moshi;naraba;moshikuba
In case According to	Shitagau;shidai;ni-yotte,tōri ni

3) 日本薩摩学生前田正毅・高橋良昭 (1869) 『改正増補和訳英辞書』 Third Edition Revised. Shanghai: American Presbyterian Mission Press

英	和
According, prep According, adv On account of In case Circumstance, s Depend-ed-ing, v Directly, adv Immediately, adv Order In order Soon, adv	ニ従フテ 夫レ故ニ・夫ニ就テ 、、、訳ケユエニ 、、、スル時ニ 事情・光景・形勢 属シテ居ル・寄リスガル・信用スル 頂直ニ 直チニ  故ニテ 直ニ・早ク・速カニ

4) メドハースト 『英和・和英語彙辞典』 1830 Batavia

英	和
By degrees In case Gradually	Dandan ni Mosikf-wa Ya-oo-yakf

5) 柴田昌吉・子安峻 (1873) 『附音挿図 英和字彙』(横浜・日就社) An English and Japanese dictionary, explanatory, pronouncing, and etymologica

英	和
As soon as	云々スルヤ否ヤ
Immediately, adv	直ニ・即時ニ・立刻ニ
Directly, adv	直ニ・即時ニ・急速ニ・立刻ニ
Depend, vi	掛ル・伝頼スル・信任スル・関係スル
Circumstance, n	事情・形勢・様子・身分・職分
As, adv.or conj	如ク・就テ・由テ・故ニ・即チ・間ニ・同様

6) E. M. Satow and Ishibashi Masakata [石橋政方] 『英和俗語辞典』 An English-Japanese Dictionary of the Spoken Language ( London, Yokohama: Kelly and Walsh )

英	和
Arrangement, n	shidai,tetsudzuki,shitake
As soon as it is finished	dekishidai
According to	ni wa, ni yotte, ni yoru toki wa,shidai shina ni yotte,koto ni yotte, shidai
__circumstances	kane shidai sonnara
__the amount of money spent	
Case	yōsu,arisama,mibun
In that__	moyō,baai
Condition,n	wake,shidai
Situation,n	migi no wake de
Account (reason)	rikutsu,wake,wake-ai,dōri
On this __	kamben,sasshi
Reason, n	shidai,jun,junjo
Consideration, n	dandan,shidai ni, oi oi
Order,n (sequence)	hodo,kurai
Gradually, adv	shidai ni,dandan,oi-oi
Degree, n	
By__s	

7) J.C.HEPBURN M.D.,LL.D. (1887 (明治20))『和英語林集成 縮約丸善版』丸善商社  
 出版地：東京 印刷：製紙分社

和	英
・ SHIDAI, n  Deki-shidai Tegami no tsuki-shidai Ame no yami shidai ・ SHIDAI NI,adv  ___samuku naru SHIDAI-SHIDAI NI,adv	Case,condition ,state,situation Order, arrangement, reason, account, consideration, in proportion to, according to, as soon as As soon as it is done As soon as the letter is received As soon as it stops raining Gradually, by degrees, by little, and little Gradually becomes colder Gradually, by degrees

英	和
Case, n In ___ Condition, n Upon this ___ Situation, n  Order,n Arrangement, n Reason,a By__of Account,n On__of Consideration, n In__of According to Degree, n By___	yōdai,yōsu,ba-ai,arisama moshi,moshikuba yōdai,yōsu,arisama,mibun,kajō, kono koto ni yotte basho-tokoro,yakume,kuchi sumi-komu shidai,narabi,tsuide,tori-shimari,chūmon, junjo narabe,sonae,shitake,shidai dōri,rikutsu,yue ni yotte,yue ni kanjō, sanyō yue ni, wake de, ni yotte kangae, omoi-yari,kamben ni yotte, ni tsuite aida shitagatte, shidai-ni,ojite, ni yotte,tori ni dan-dan,oi-oi,shidai-shidai ni.

以上の7種の明治期の英和和英辞書を見ると、「次第」は英訳では、「Order, arrangement,reason,account,consideration,in proportion to, according to, as soon as, case, state condition, situation」という意味を表している。さらに、それらの意味を和訳すると、

「次第」は、「順序、予定、理由、記事、事情／考慮、率、～による、すぐ、場合、状態、状況」という意味を表すことが考えられる。

なお、「次第に」は、英語では「gradually」であり、これを和訳すると「段々」という意味を表している。

## 6. 明治期以降の「次第」の用法

ここでは、明治期以降の「次第」の用例を『朝日新聞』『太陽』『近代女性雑誌』や明治期の小説などから収集し、「次第」に接続する前の部分について、まず見てみていくことにする。

### 6.1 V-る+次第

- ・故に正金なければ洋品を買ふ<sup>レ</sup>能はず 是に於て正金を求むる次第に急にして紙幣と正金の間に若干の差を生ずるに至らん（『明六雑誌』 神田孝平 明治六年）
- ・詔勅も出ず、論説もかけず、社會の地位も兎角得られぬと申す次第であります。（『太陽』 1895）
- ・双方の國家、國民の益々親密ならんことを切望する次第であります。（『太陽』 1909）
- ・なぞと考へますと、實行して見る次第にも參らぬので御座います。（『近代女性雑誌』 1909）
- ・かゝる彫刻を我が國に有する私こそ、最も幸福なりと自ら喜ぶ次第である。（『太陽』 1917）
- ・これで烟草でも買つてと言つて、それ鼻薬の出る次第さ。（『二百十日・野分』）
- ・私共がこんな御相談に參るといふことからして、恥入る次第です。（『破戒』）

上記に見られる用例のように、「V-る+次第」の用法は、現代語においても意味用法に変化が見られない。

### 6.2 V-た+次第

- ・その途中で、この通り斬り殺ろした次第。（『近代女性雑誌』 1894）
- ・實に酸鼻の至り困つた次第ではあるまいか。（『太陽』 1901）
- ・そこで勢ひ其組織の不完全に言及した次第である。（『太陽』 1909）
- ・結果或る條件の下に辛うじて御承諾を得ることが出来ました次第でございます。（『太陽』 1917）
- ・時たりともこれを中止するの権利だけは保留致した次第でございます。（『太陽』 1925）
- ・自分で進んだ次第では無く、道子が出席することに成つた。（『婦系図』）
- ・体に障つてはと思ひまして葬式が済むと車で御送り申した次第です。（『野菊の墓』）
- ・そんな事があつたら早速私が看護してやろうと思ひまして、薬などを用意して參つた次第なのでございます。（『学生時代』）

上記に見られる用例のように「V-た+次第」の用法は現代語においても意味用法は変わっていない。



### 6.3 ～ような+次第

- ・八月中に已に冬着の準備まで済ましたやうな次第でございます。(『近代女性雑誌』1909)
- ・余裕を生じたので、昨年の如きは再び新造艦計畫を企てたやうな次第で、此人の效勞は眞に大したものであります。(『太陽』1909)
- ・未だ乾き切らぬ中に會場へ運んだやうな次第であつた。(『太陽』1917)
- ・田中に満足を與へてやつてもよいと言つて居るやうな次第だから、床次一人は副總裁で我慢するかも知れぬ。(『太陽』1925)

次に、現代語における「～ような次第」の用例を以下に挙げておく。

- ・覆面推理小説作家として売り出したかったらしいが、「ばれた」ことが吉と出たやうな次第。(朝日新聞2013年10月6日)
- ・こうして今、執筆をしている場所も、ほどよく静かに落ち着いたカフェを選んでいるやうな次第でありまして、ひたすら修行に精進していた頃は、「静かなお気に入りカフェ」などというごさかしいものなど必要ではなく、(朝日新聞2013年7月18日)

「～ような次第」という形は、近代語では1909年頃に用法が見えてきた。しかし、現代語ではこの用法は減少してきており、段々使われなくなると思われる。朝日新聞オンラインデータベースで調べてみたところ、平成期では、6例しかなかった。そして、用例を調べた結果、「やうな次第」の「やうな」のところを「よゆうな」の類義語である「らしい」「みたい」を用いたもの、つまり、「らしい次第」「みたいな次第」は1例もなかった。「～ような次第」については、「よゆうな」の類義語である「らしい」「みたいな」では言い換えられないことがわかった。

### 6.4 の+次第

- ・人が唱ふるに拘はらず、政府當局者は之を斷行せざるは大に遺憾の次第であります。(『太陽』1901)
- ・上昇の力を得るのであるが、夫れが船の上では前言ふた通りの次第で、到底廣い場所も得られぬのであるから…(『太陽』1909)
- ・そして斯様な所へ出合せた看病婦は實に迷惑の次第です。(『近代女性雑誌』1909)
- ・無法な處置を執つたとあつては、益々其の怨嗟を増加するは勿論の次第である。(『太陽』1917)
- ・仍て各派代表議員井上、柴田、松井、田井の四氏は直に鹿島市長を市長室に訪ひ右決議の次第を告げて賛同を求めたる。(『神戸新聞』1916年9月12日)
- ・とて之を叱る「ならんが娘の身と爲りては當惑の次第ならずや。(福沢諭吉)

この近代語における「の+次第」の用法は現代語においてはあまり用いられていないようである。

## 6.5 ～べき+次第

- ・快なる生活に便利なる物質的條件を増進すると云ふ點に在るは悲むべき次第なり 之に反し基督教の理想は神の國を求めよ左らば凡てのものは… (『太陽』1895)
- ・政界の一大恨事であつて、世界列國に對しても愧づべき次第である。(『太陽』1909)
- ・纔かに投書によつてのみ意見を發表し得しめるのは誠に悲むべき次第であり、こゝに至らしめたのはそも誰か。(『太陽』1917)
- ・その嫡子在國し且妻子國許へ引き取り候とも勝手たるべき次第の旨、去々成年仰せ出され、めいめい國許へ引き取り候面々もこれあり候ところ、(『夜明け前』)
- ・輸出増進を示しつつあるを窺知するに足るべき次第なるが海外市場の将来より見れば国内市価の奔騰に伴れて今後漸次其市価を昂上せしむる事疑い無きが如し。(『中外商業新報』1916年9月11日)

近代語における「～べき+次第」については朝日新聞では用例が一つも見当らなかったことから、現代語ではこのような用法はなくなつたと見られる。

## 6.6 A+次第

- ・何んでもない事であるが、地方の開業醫者などには甚だ面倒な次第ぢや、(『太陽』1901)
- ・今日の如く、文藝の眞價を知らぬと言つては、餘りに耻しい次第であるから、せめては附焼刃なりとも、つけて置きたいと思ふ。(『太陽』1909)
- ・套を脱せず汗水垂らして勞力を無益に費すやうな方針では實に心細い次第で、能率の悪い努力ではいくら努力しても駄目である。(『太陽』1917)
- ・技能其他諸般の設備に關しても、我が國の現状は洵に理想に遠い次第である。(『太陽』1925)
- ・お恥しい次第ですが、どこか一本も二本も足りないところのある、いい加減な氣持だったので。(『多情仏心』)
- ・「いや。こんなヴァルガアな事ばかりしているんで、自分ながら浅ましい次第です」(『北原白秋詩集』)

「A+次第」は日本語文型辞典には記述がないが、Aにあたる部分には形容詞も形容動詞も両方見られ、近代語ではよく用いられていた。現代語でも用いられることはあつて、自らを卑下する言い方に用いられている点で共通している。

## 6.7 ～という+次第

- ・然しながら其劔は決して缺くべからざる兵器であるといふ次第ではない。(『太陽』1901)
- ・御見舞の御使者を遣はされ、人參一斤御下賜になつたといふ次第で、今から考へれば滑稽も甚だしいものでありました。(『太陽』1909)
- ・まづ消化はどういふ順序に依つて行はるかといふ次第をこゝに説明して見やう。(『近代女性雑誌』1909)

- ・反戦黨許りで、此等は一刻も早く平和の回復を希望して居るといふ次第である。(『太陽』1917)
- ・星が辭職してから原の次官となつて、内閣と共に殉死したと云ふ次第ぢや。(『太陽』1917)
- ・さあ、断つて遣れんと云ふ次第ではないが、お前の意はどうだ。(『金色夜叉』)
- ・こと蠱嬰く官没されたといふ次第なのである。(『太公望・王羲之』)
- ・但し罰をうければこそ、贖いもあると云う次第ゆえ、やがて御主の救拔を蒙るのも、それがしひとりにきわまりました。(『奉教人の死』)
- ・決議を急ぐに至ったわけだそうな恚うなつて見ると折角仲裁運動に取掛つた滝川会頭は聊か手持不沙汰という次第だが手持不沙汰で済まされぬのは会社側である。(『大阪毎日新聞 兵庫県附録』1917年10月22日)

なお、現代語における「という次第」の用例は以下の通りである。

- ・仕方ないので別の庄屋宅に宿泊し「誠に難渋の趣、心配致す事に候」という次第であつた。(『朝日新聞』2013年6月25日)
- ・場所は勇払埠頭。ニシンは沖から陸に向かって突進するといわれ、当然のように西港のどん詰まりに位置する勇払埠頭に群れがたまるという次第。(『朝日新聞』2013年4月12日)

この用法は近代語に多く見られる。『日本語文型辞典』には記述がない。この「という次第」の中に「～という」の言葉が入らなくても意味が変わらないようである。従つて、「という」が文章の中で強調として使われていると考えられる。

## 7. 「次第」に接続する後の部分について

ここからは、「次第」に接続する後の部分について見ていくことにする。

### 7.1 次第+であります・ちゃ・でございます・です

- ・詔勅も出ず、論説もかけず、社會の地位も兎角得られぬと申す次第であります。(『太陽』1895)
- ・政界が紛糾してからに擧國一致どころの話でないやうになつた次第ぢや。(『太陽』1917)
- ・何時たりともこれを中止するの権利だけは保留致した次第でございます。(『太陽』1925)
- ・そりゃほねおりしだいよ。しかしよけいはけつしてはだせないぞ。すこしばかりのことはこころづけましょう。(アーネスト・サトウ p 90, n 18-54)  
(S.) That depends on the rate you go at ; but I shan't give you much. I suppose I must remember you to a small extent.
- ・なに、べつにむずかしいことはございません。べんきょうしだいです。(アーネスト・サトウ p 104, n 20-13)  
(T.) Oh, no ! There's no particular difficulty. It depends on a man's diligence.

- ・ローリング、チェックすら付いて居ないのだから、松山丸の三十度の傾斜動揺も当然の次第だ。(『時事新報』1921年4月6日～1921年6月2日)

用例を見てみると、「次第であります」「次第です」「次第だ」は、近代語でも現代語でも全く同じ使い方であることがわかる。

## 7.2 次第+ではない

- ・老生が國民に對する改良の注文は、餘りの多きを望む次第ではない、唯新版圖の臺灣歸化人や、劣等の朝鮮人にも笑はれる。(『太陽』1901)
- ・悉しくは読みもせず、且つ細かに覺えて居て、爰で語つた次第ではないが、あり合せの道中記から一面佛を寫して置く——(『太陽』1909)
- ・技巧の上でも、何も今度初めてあゝいふ没線式の省筆を試みた次第ではない、此の春金鈴社の展覽會に出した牛や鳥にも既に試みたり、(『太陽』1917)
- ・博士になったら遣つてもいいなんて威張つてる次第じゃない。(『吾輩は猫である』)
- ・尤もこの逸話にしても、「その好事の勝れたる想像すべし」と云ふより外に考へられない次第ではない。(『奉教人の死』)

この形は近代語で、「次第ではない」の前に来る言葉は「V-る」「V-た」「-ない」などがあるが、現代語の話し言葉ではあまり用いられないものである。

## 8. おわりに

以上の分析結果から明治期における「次第」をまとめると、次のようになる。

1. 明治期の英和和英辞書で「次第」という意味を調べたところ、「Order, arrangement, reason, account, consideration, in proportion to, according to, as soon as, case, state condition, situation」と記述されていた。それらの意味を和訳すると、「順序、予定、理由、記事、事情／考慮、率、～による、すぐ、場合、状態、状況」という意味を表すことが考えられる。
2. 雑誌『太陽』及び『近代女性雑誌』における用例の表を見て見ると、1909年頃から「次第」という形が文語から口語に用いられるという大きな変化が見られる。
3. 明治期における「～べき+次第」、「次第+にて」「次第+において」「次第に次第に」という用法は現代語では全く使われていないことがわかった。なお、「～ざる+次第」「勝手+次第」「次第+すぐ」「次第によっては」という形態は現代語においてもまだ見られるが、その数は少なく、次第に使われなくなっているように思われる。
4. 明治期における「次第に」は現代語での「段々、徐々に」という意味で用いられる一方、「次第で」という意味もあった。現代語では「次第で」及び「次第に」は全く違う用法で用いられているようである。
5. 明治期において、「次第だ」という言い方は強調的な言い方で多く用いられている。他に、「次第によっては」は、「次第」と「によって」が意味的に重複して二重になっている例も見られた。また、近代語では助詞の使い方によって言い換えられるものが多

い。現代語では、助詞「で」「にて」「において」「に」はそれぞれ違う用法として用いられるのに対して、近代語では「次第」を伴って、同じ意味および用法で用いられている。

### 【参考文献】

- ・市川保子編（2010）『日本語誤用辞典 外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク
- ・江口正（2002）「『AはB次第だ』の解釈について—値の間の相関関係—」『福岡大学日本語日本文学』(12) pg. 72-82
- ・郭木蘭（2006）「『次第』考続編—ジャンル別の用法について—」東洋大学大学院紀要（文学研究科）42巻（文学・社会学）
- ・白川博之監修 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- ・杉本つとむ（1961）『近代日本語の成立』桜楓社出版
- ・田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院
- ・永野賢（1953）「表現文法の問題—複合助詞の認定について」金田一博士稀記念論文集刊行会（編）『金田一博士古希記念言語民俗論叢』三省堂
- ・松木正恵（1990）「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』
- ・松木正恵（2005）「複合辞研究史（4）「後置詞」というとらえ方」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』(54) pg. 15~26
- ・松木正恵（2007）「複合辞研究史（6）「複合助詞」の特質」『早稲田大学教育学部学術研究 国語・国文学編』(56) pg. 29-35
- ・松木正恵（2008）「複合辞研究史（7）『複合辞』の体系化をめざして—認定基準の設定と複合辞一覧」『早稲田大学教育学部学術研究国語・国文学編』(57) pg. 1-12
- ・森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク
- ・森田良行・松木正恵（1990）『日本語表現文型：用例中心・複合辞の意味と用法』
- ・鳴海伸一（2006）「『次第』の接尾語用法の成立と展開」『国語学研究』45巻2006年3月 pg. 110-120
- ・山田敏弘（2002）「格助詞および複合格助詞の連体用法について」『岐阜大学国語国文学／岐阜大学教育学部国語教育講座編』(29) pg. 27-43
- ・ラナディレクサ デインダ（2009）「複合格助詞に関する考察—『において』の意味用法を中心に—」『立教大学日本文学』(103) pg. 172-181
- ・ラナディレクサ デインダ（2011）「複合助動詞に関する考察—近代語における『つもりだ』の意味用法を中心に—」『立教大学日本文学』(106) pg. 59-68
- ・ラナディレクサ デインダ（2011）「複合助動詞に関する研究—近代語における『はずだ』の用法を中心に—」『立教大学大学院日本文学論叢』(11)

### 用例調査の対象とした資料、CD-ROM およびデータベース

- ・江戸語資料としては日本古典文学大系（岩波書店）に収められた諸本による。
- ・明治大正期の小説は「新潮文庫 明治の文豪CD-ROM」ならびに「新潮文庫 大正期の文豪CD-ROM」による。
- ・総合雑誌『太陽』『近代女性雑誌』は国立国語研究所のコーパスを利用した。

- ・ 総合雑誌『明六雑誌』コーパス（国立国語研究所）
- ・ 「神戸大学新聞記事文庫」オンラインデータベース
- ・ 聞蔵Ⅱビジュアル『朝日新聞』オンラインデータベース
- ・ ヨミダス歴史館『読売新聞』オンラインデータベース
- ・ 「青空文庫」インターネットの電子図書館
- ・ Ganesha（1998）『KUAIWA HEN Twenty-five Exercise in the Yedo Colloquial, For the use of Students』
- ・ 加藤知己・倉島節尚（1999）『幕末の日本語研究 S.R ブラウン会話日本語 複製と翻訳・研究』三省堂

（らなでいれくさ でいんだ がやとり ウィディアタマ大学日本語学科教師）